

- ユーザーカンファレンス 2013 開催レポート&アンケート集計結果
- 第 15 回 図書館総合展 出展レポート

ユーザーカンファレンス2013開催レポート

## 2回目を迎え、さらに充実のプログラム

### ユーザーカンファレンス2013開催



杏林舎とトムソン・ロイターの共催で、ScholarOne Manuscripts<sup>TM</sup>(以下S1M)ユーザーカンファレンス2013が11月12日に開催されました。本カンファレンスは、昨年に初開催し、大好評頂いたことを受けての第2弾です。

皆様のご期待の高さを物語るように、当日は今年一番の寒さとなったにも関わらず、大勢のお客様にお集まり頂き、会場の秋葉原コンベンションホールは熱気で包まれました。

より意識の高いトピックを編集ユーザー様と共有したい

今回のカンファレンスは、S1Mの便利な使い方やよくある質問といった実用的なテーマから、ユーザーによる運用事例、バージョンアップの情報さらには、国際競争力等のグローバルなトピックまで、あらゆる角度からS1M、そしてジャーナル編集について考察した、盛り沢山のラインアップです。

杏林舎の嶋田による開会の挨拶にもありま



あるある！ 共感を呼ぶユーザープレゼンテーション&FAQ紹介

他ジャーナルはどのようにS1Mを利用しているのか、ジャーナルの編集者にとって気になることです。そこで、昨年に引き続き、ユーザーによるプレゼンテーションが行われました。今回のプレゼンターは、公益社団法人日本農芸化学会の日岡康恵氏と公益社団法人化学工学会の山下和子氏です。

日岡氏は、作業を効率化するために欠かせない「レポート機能」を、山下氏は、不正投稿を防止する為の「CrossCheckの運用事例」をそれぞれ、実務担当者ならではの目線で分かりやすく、具体的に発表頂きました。実際に導入をお考えの方々のために、独立行政法人科学技術振興機構の亀井威則氏によるCrossCheckの詳細に関する解説もありました。

ユーザープレゼンテーション同様、参加者の皆様の共感を呼んでいたのが、杏林舎の真鍋が発表した『FAQ紹介・サポートセンターによくある質問』。S1Mについて常々疑問に思われていたことが含まれていたようで、ご参加の皆様が「あるある!!」といった様子で、頷かれていたのが印象的でした。

すぐに使えるお役立ち設定  
新機能の紹介も

前回のカンファレンス終了後に実施したアンケートをもとに企画したセッションもありました。一つが前述のFAQ紹介。もう一つが、杏林舎の嶋田による『S1Mを便利に使うための設定』です。結果通知の自動添付、掲載号の管理、条件に合った論文の抽出方法の三つをご紹介したところ、「早速試してみました。もっと早く知りたかった」「カンファレンスで紹介して

いた機能を付けてください」等のご連絡を頂きました。S1Mの豊富な機能を再認識して頂き、嬉しい限りです。

さらに、進化を続ける機能の紹介として、杏林舎の島海より、最近行われたバージョンアップの説明も行いました。「システム上の案内は読み流していたけど、まとめて詳しく知ることができてよかった」とのお声を頂きました。

国際競争力・発信力を  
いかに強化するか

グローバル化する学術ジャーナル界において、担当するジャーナルの価値・評価はどのようなものか。これはジャーナル編集者にとって、最も切実な関心事の一つです。今回のカンファレンスでは、実務の効率アップだけでなく「ジャーナルがいかにグローバル化を生き抜くか」にも主眼を置いて考察しました。

トムソン・ロイターの波多野薫氏はインパクトファクターを軸に、公益社団法人日本動物学会の永井裕子氏はオープンアクセスをキーワードとして、それぞれ、国際競争力・発信力についてお話くださいました。

お二方ともに、自誌の現状を正確に検証・把握すること、その上で世界の動向を知り、ジャーナルの魅力を向上させることが重要と強調されていました。「自誌を、そして競合誌を正確に把握していますか?」「投稿を待っているだけではありませんか?」「自誌の収益は?」といった刺激的な問いかけに、会場の空気が引き締められ、一新したのを感じずにはいられませんでした。

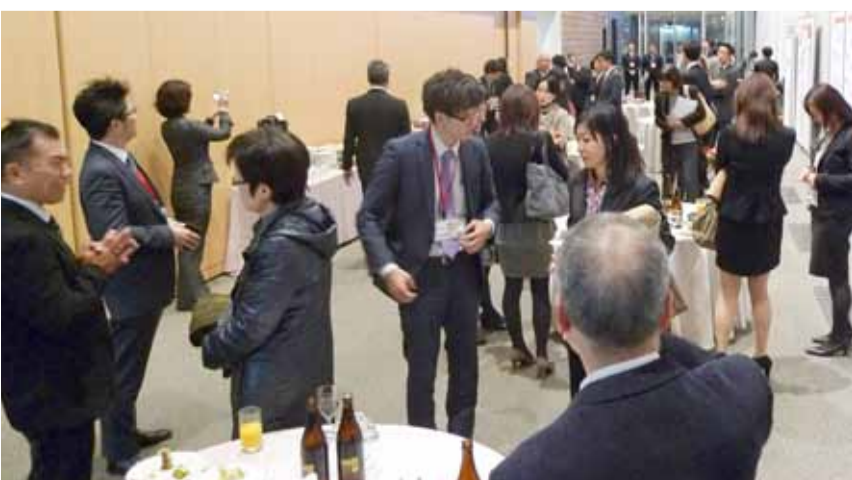
グローバルな視点でジャーナルを考えた時に避けて通れないのが英語の問題ということで、株式会社クリムゾンインタラクティブ・ジャパンの古屋裕子氏に発表をお願いしました。研究者にとっての英語に関するアンケートを

もとの、英文校正の観点からお話を伺えるのは貴重な体験でした。

ジャーナル編集者の交流の場  
意見交換会&ポスター展示

プレゼンテーション終了後には、CSE(世界科学編集者会議)への参加報告、投稿画面のカスタマイズの一例、レポート機能等のポスターが展示されているホワイトエにて、意見交換会が行われました。普段なかなか接する機会のない、編集担当者の方々が交流する場を提供したいと考え、前回より実施しています。今回も多くの方々が軽食を楽しみながら、リラックスしてお話されている様子を拝見すると、今年もユーザーカンファレンスを開催してよかったと、スタッフ一同に安堵の笑顔が見られました。

S1Mユーザーカンファレンスは継続的に開催して行く予定です。皆様より寄せられたご意見を参考に、最新の情報を提供してまいります。今後の開催に是非ご期待ください。



今回のカンファレンスで、あなたの知りたかったことに  
応えたセッションはありましたか? (複数回答可) (人)

① オープンアクセス時代のジャーナルセレクション	14
② ユーザープレゼンテーション1 Reportの運用事例	15
③ SIMを便利に使うための設定	19
④ FAQ紹介: サポートセンターによくある質問	24
⑤ ジャーナルの国際競争力の強化について	20
⑥ 研究者にとっての英語	9
⑦ バージョンアップ情報(新機能の紹介)	15
⑧ J-STAGEにおけるCrossCheckの活用	10
⑨ ユーザープレゼンテーション2 CrossCheckの運用事例	21
⑩ 杏林舎によるユーザー向けの活動	6
⑪ 事前アンケートの回答について	1

上記で選択されたセッションは、  
充分満足いただける内容でしたか?

① 満足	12
② ほぼ満足	29
③ 不満足	1

- 他学会の使用事例を具体的に伺うことが出来、参考になりました。
- 「ジャーナルの国際競争力の強化について」はもっと時間をかけて詳細に説明頂きたかった。
- 今後のシステム運用のヒントとなった。
- 特に「ジャーナルの国際競争力の強化について」については担当しているジャーナルについてとても考えさせられました。大変参考になりました。
- 他学会での利用例がためになった。
- 大いに満足。バージョンアップはついていけないところもある。
- PowerPointだけでなく、実際の画面が見れるとよかった。
- 英文校正の観点から、研究者の立場や意見を知ることが出来て良かった。

今回のカンファレンスはいかがだったでしょうか? (人)

① とても参考になった	13
② 参考になった	28
③ あまり参考にならなかった	0
④ 参考にならなかった	0

今回のカンファレンスのご感想をお聞かせください

- SIM、CrossCheck等の実際の実用例を聞くことができ、参考になりました。
- まだ導入が決まったばかりですが、システムについても勉強していかねばと思いました。
- CrossCheckの導入を検討をしているので、参考になった。
- ユーザープレゼンテーションはとても参考になった。
- 事務局内や学会の先生方とお話だけではなかなかジャーナル業界全体の動きを把握することは出来ないで、本日のご講演は大変参考になりました。次回も参加したいと考えております。ありがとうございました。
- いろいろ参考になりました。会場で事前アンケートの回答をしてくださったのがよかったです。
- 基調講演、特別講演の中で、自誌の今後の運営のヒント・刺激になる点があった。またバージョンアップ等で知らない機能の紹介があり、参考になった。
- 学術ジャーナルのあり方から、オンライン投稿審査システムの現場に則した内容まで。盛り沢山で面白かった。
- SIMの操作を実際にやっている者ではないが、世界的なジャーナルの動向等は興味深かった。また、CrossCheckのユーザープレゼンはとても面白かった。
- ユーザープレゼン(具体例)がもう1つくらいあったらよかった。
- とても有用な情報を得ることができました。
- オープンアクセスに対する対策が必要だと感じた。
- ポスター展示をもう少し充実されると嬉しいです。
- 運用事例は大いに参考になる。時期をずらしてほしい(科研費申請の時期(今週)なので)
- topicが多すぎだと思う。テーマを絞ってやった方がよかったのでは。

次回以降のカンファレンスで企画して欲しい内容など  
ありましたらご記入ください

- 特別講演が非常に興味深かったので、次回この時間を設けて頂ければと思います。自分がもっと勉強しなければ、いけないとも思いました。
- 可能ならFAQをもっと充実させていただきたい。
- 実際にPCを使いながら、もっと実践的なことができたらかった。著作権、COIについて(いつもよくわからないので…)。
- 細々したVerUpの説明は不要と思う。(Topicを絞ってインパクトのある部分のみ説明をして欲しい)。
- 多くの投稿数を抱えるジャーナル担当者によるScholarOneの有効活用法等あれば教えてほしいです。
- 本日の「オープンアクセス時代のジャーナルセレクション」、「研究者にとっての英語」の続編。
- 二重投稿にあたるかどうか、の例。少数でのセミナーにも期待。
- 今後のユーザー向けの活動の実行を希望します。
- レポート機能でできることの紹介。

アンケートの結果を見るとSIMの編集ユーザーの皆様はシステム利用例等の実務に関わる内容はもちろん、グローバルな視点から論じられた「ジャーナルの国際競争力の強化について」や不正防止のための「CrossCheckの導入例」といったトピックにも高い興味を示されていることが分かります。

皆様の興味にお応えするために、今まで以上に学術ジャーナル運営に関する情報の収集を強化し、オンライン投稿・査読システムを通じたジャーナルの質と価値の向上に貢献できる様に努力してまいります。今後のカンファレンスでご希望のトピック等がございましたら、是非、弊社スタッフまでお知らせください。



『学術ジャーナルの質と価値の向上を考える』  
フォーラムも開催 初出展! 第15回 図書館総合展 出展レポート

2013年10月29〜31日の3日間、第15回図書館総合展がパシフィコ横浜にて開催されました。この展示会には、自治体や大学等が運営する図書館、出版社・印刷会社等の企業など200以上の団体が、ブース出展、フォーラム開催、ポスター展示等で参加しました。杏林舎は、学術専門電子書籍サービス「S1M」やオンライン投稿・査読システム「S1M」等の製品やサービスを紹介するブースを初出展し、『学術ジャーナルの質と価値の向上を考える』各種プラットフォームの紹介』と題したフォーラムを開催しました。

フォーラムには70名にのぼるお客様にお集まり頂きました。トムソン・ロイターの波多野薫氏が、インパクトファクターを軸に、ジャーナルの国際競争力・発信力の強化について講演されたのをはじめ、S1Mの活用、編集・出版のサイクル、ジャーナル制作におけるXMLのメリット、オンライン校正進捗管理システム「Kops」による効率化、学術専門電子書籍サービス「S1M」の有用性を解説しました。終了後には、興味を持たれた参加者の方々にお越し頂き、ブースが一杯になるという光景が見られました。

今後こうした展示会にて、S1Mをはじめとした製品やサービスの最新情報を発信してまいります。ぜひお立ち寄りください。

編集後記

この度杏林舎より、S1Mをご利用の皆様、および今後ご利用を検討されている皆様に向けて、ニュースレター「S1M NEWS」を創刊する運びとなりました。S1Mの操作のコツや学術ジャーナルに関わる有益な情報などを年4回発信していく予定です(『S1M』はScholarOne Manuscripts™の略です)。創刊号にあたる本号では、新人もベテランも弊社一丸となって取り組んだ「S1Mユーザーカンファレンス2013」と「第15回図書館総合展」での弊社によるフォーラム&展示のレポートをメインにお届けいたしました。S1Mユーザーカンファレンスは、今回で2回目ですが、前回と同様に多くの方にご参加頂き、盛会裡に終了できました。ご発表頂きました方々におかれましては、突然の依頼にも関わらずご快諾頂きまして、心より感謝申し上げます。カンファレンス後の意見交換会では、ご多忙の中多くの参加者の方々にお残り頂き、交流を図ることができました。普段のメールや電話でのやり取りではなく、皆様に直接お会いできましたことをとても嬉しく感じております。

来年早々には小グループでのセミナー開催も予定しております。今後も皆様にご満足頂けるよう努めてまいりますので、何卒よろしく願い申し上げます。(鳥海英夫)

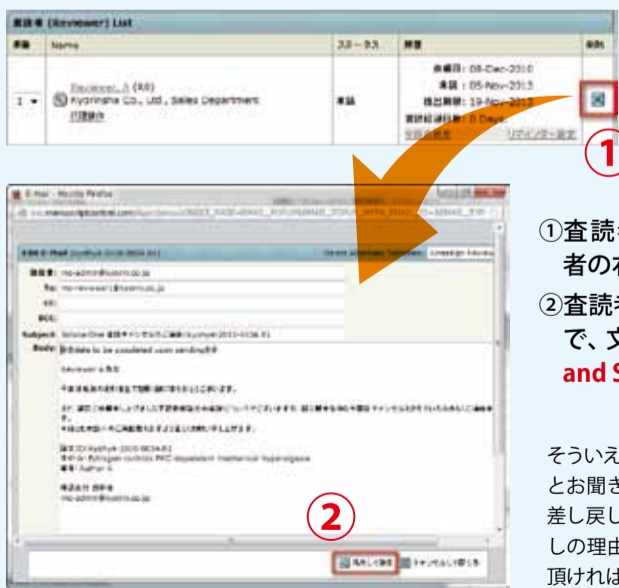
S1M NEWS  
2013年12月10日発行 第1号

発行 株式会社 杏林舎  
〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10  
TEL. 03-3910-4311  
FAX. 03-3949-0230  
URL http://www.kyorin.co.jp

編集・制作・デザイン 株式会社 杏林舎  
E-mail s1mnl@kyorin.co.jp

©株式会社 杏林舎 本誌掲載の記事・写真・イラストレーション等の無断転載を禁じます。

査読中の論文の差し戻しについて



投稿受付時の差し戻しはファイル管理(Manuscript Files)画面下部の論文を著者ダッシュボードへ戻す(unsubmit)をクリックするだけで良いのですが、すでに査読依頼を行っていた場合、その前にひと手間加える必要があります。具体的には以下の作業です。

- ① 査読者リスト (Reviewer List) より担当査読者の右側にある 削除 (Remove) をクリック
- ② 査読者宛でのメール編集画面が立ち上がるので、文章を適宜変更して保存して送信 (Save and Send) をクリック

そういえば学生時代、教授から「査読が大変だ」とお聞きすることが度々ありました。査読者へ差し戻しのメールを送る際は、できれば差し戻しの理由だけではなく、感謝の気持ちも添えて頂ければ…なんて元院生としては思います。

はじめまして、学術ソリューショングループの山田です。昨年までは大学院で植物の研究をしておりましたが、専門誌をパソコンに持ち替えて、現在はS1Mと格闘する毎日です。『S1M NEWS』創刊にあたり、初心者代表としてコーナーを1つ担当することになりました。精一杯皆様のお役に立てるような情報を発信してまいりますので、どうぞよろしく願いいたします!

